ずれにせよ実際に逢っているのではなく、ネットでつながる交流らしい。「うすく居て」がうまい。そこに没入するのではなく、淡く参加しているのだ。

コンテナの角つぎつぎに光らせて貨物列車はカーブを曲がる　　松橋雅実

八〇年代終りぐらいまで貨物列車の歌がかなりあったように思うが、最近は見なくなった。貨物列車自体、見なくなったように思う。コストや便利さで、コンテナトラックにとって変わられたのだろうか。一首に懐かしさを読むのは私だけではあるまい。

感染者ふえてゆく秋　粘土には夕べのわれの爪痕があり　　野原亜莉子

上二句に、現在進行形の不気味な空気が読める。影響されて、下句の「爪痕」に生の痕跡といったらいいか、平常時とはちがう意味が浮かび上がってくる。

針葉樹の森のようなる棒グラフ見て噛み潰すいちご大福　　天野美奈子

「針葉樹の森のようなる棒グラフ」は、テレビか新聞の、新型コロナウイルス感染症にかかわる棒グラフ。下句、さして関心はないけれどつい見てしまう、そんなわれわれの日常を浮かび上がらせて、うまい。

床に入り眼とじれば聞こゆるなり向つ山より鹿の子の鳴く　　小笠原政男

古典和歌にはたくさん出て来る鹿の声だが、現代短歌ではめずらしい。最近、各地で鹿が増えているらしく、被害をうたった農家の人の歌を見ることはあるが、この歌のように親しいものとして鹿の声をうたった短歌は、久しぶりに見たような気がする。

映像を見つめる瞳のその下のマスク　白、黒、ピンク、花柄　　清水あかね

一連の他の歌から見て、一首の場所は女子高の教室、「映像」はアラジンが出て来る何からしい。みな前方の映像を見ている顔を、映像の側から描いた作。「……ますく　白、黒、ピンク、花柄」と五個の名詞を並立させた下句の音楽が新鮮。

夕方に停電あれば夕闇という懐かしきものに触れたり　　十亀弘史

この歌を読んで、われわれ現代人にとって、なるほど夕闇はなつかしいものなんだ、とあらためて納得させられたような気がする。少し暗くなるとすぐ灯りをともすことに慣れた私たちの生活。

風信子（ヒヤシンス）の息静かなり白き根をガラスの底にかすか伸ばして　　児島直美

水栽培のヒヤシンスのかすかな生命活動をクローズアップした一首。「息静かなり」がうまくいったか、無理だったか、が評価の分かれ目だろう。私は、生命のかもしだす気配を表現して、うまくいったと思う。

けだものの悲鳴にも似て半身を返し主審はアウトと叫ぶ　　小畠千佳

野球の審判である。けだものの悲鳴のように半身を返した、という表現がすべての一首。私の記憶の中に、そんなアンパイヤーが二人か三人見つかった。